世田谷の地域特性の析出

青木　務 *
永田　裕子 *
真鍋　太一 *
小山　弘美 **

研究の概要

(1)研究目的

本研究は、せたがや自治政策研究所の調査・研究活動の基礎と位置づけ、時々刻々と変化していく世田谷区の人口構造などを捉え、政策立案などの基礎となる情報資源の構築を目的としている。平成 19 年度から継続され、平成 24 年度も引き続き国勢調査や住民基本台帳のデータを活用して、世田谷の地域特性を析出するための社会地図（地図上に地域の社会的特性をマッピングすることにより、地域特性を可視化する技法）の作成を進めている。

(2)研究方法

地域特性の析出に当たっては、作成した社会地図などを活用して、地域でどのような人々がどのように生活しているのかについて、本区を出張所・まちづくりセンターのある 27 地区ごとに分けて、各地区の特徴を色の濃淡にて把握することを試みる。

社会地図は、最もよく使われている方法である平均値と標準偏差から、指標値を 6 分割して値が大きいほど色が濃くなるように塗り分けた。これによって、対象範囲における相対的な位置づけを地図で示すことができる。

* せたがや自治政策研究所研究員　　** せたがや自治政策研究所特別研究員

(3)研究内容

平成 24 年度は、下図の枠組みで調査・分析を進める。

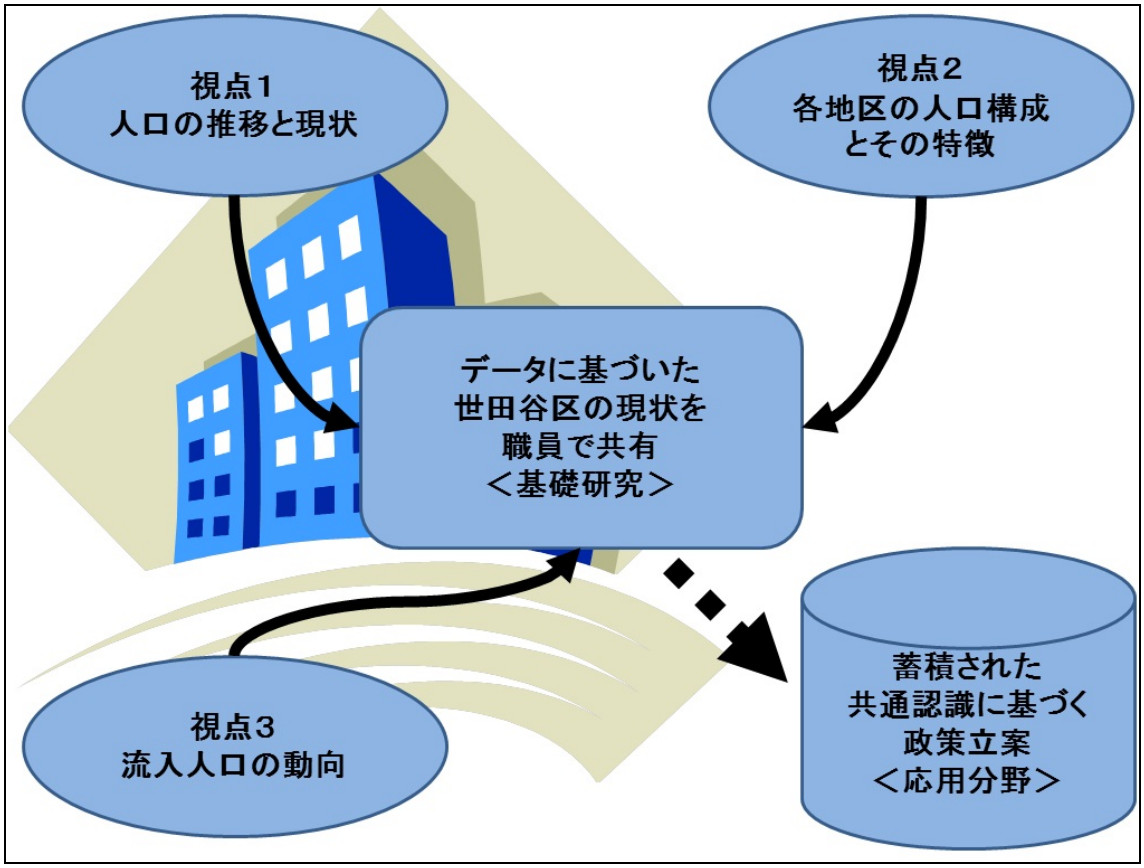


図 1：平成 24 年度『地域特性の析出』枠組み

本年度は、世田谷区のデータを分析するにあたって３つの視点（上図参照）から、地域特性を析出することを試みる。

視点 1「人口の推移と現状」では、国勢調査と住民基本台帳のデータからこれまでの推移をグラフ化し、世田谷区の人口を長期的な視点から概観する。

視点 2「各地区の人口構成とその特徴」では、国勢調査の結果を活用して、本区の社会地図を作成し、区内にある 27 地区の特徴を視覚的に捉えることを試みる。

視点 3「流入人口の動向」では、本区に転入する人口について着目し、長期的な人口増加へ影響を与える層がどのような人たちなのかについてデータに基づいて考察する。

1. 人口の推移と現状

はじめに、世田谷区の人口の推移から現状や中長期的な傾向について分かることをまとめていこう。

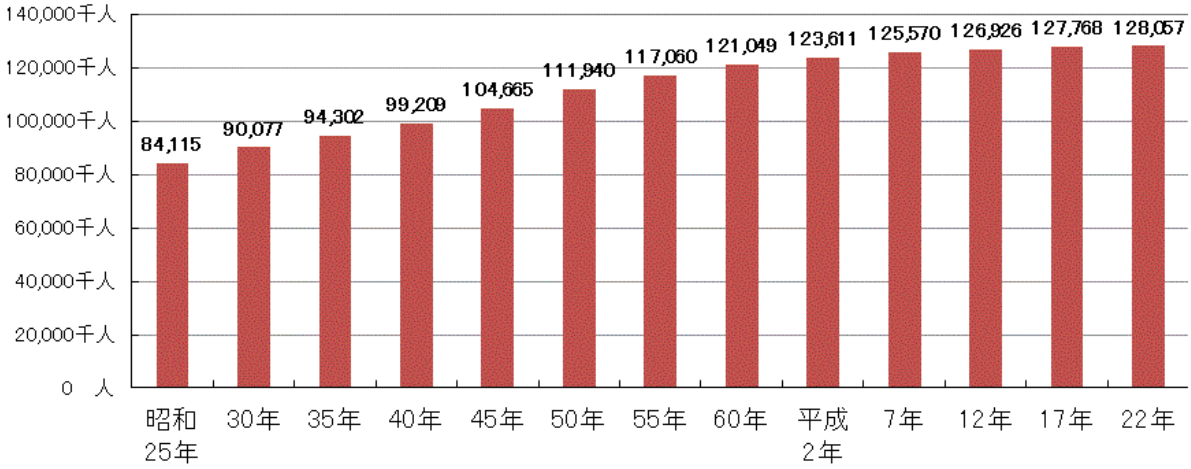


図 2：人口の推移（全国）　出典：国勢調査

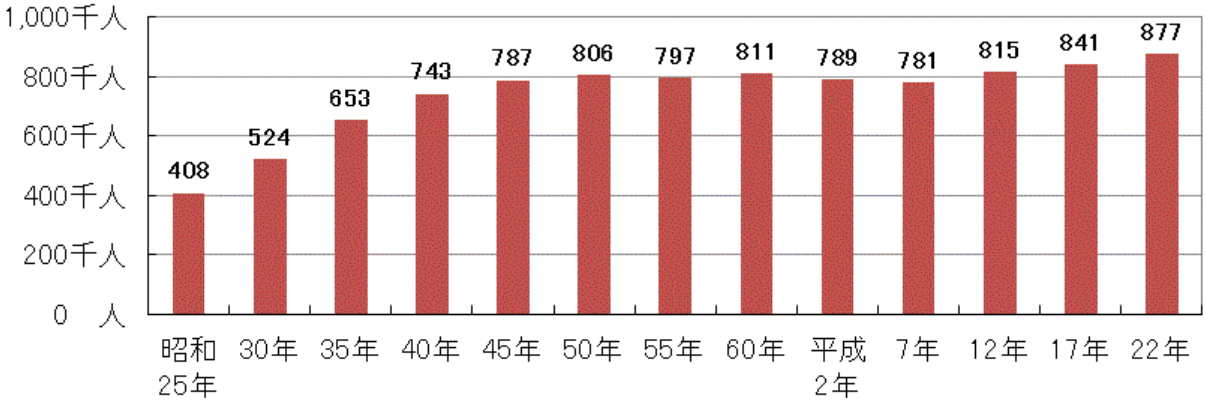


図 3：人口の推移（世田谷区）　出典：国勢調査

グラフから読み取れること

・世田谷区の人口は 877,138 人（平成 22 年　国勢調査）となっている。

・本区の人口は平成 7 年から増加傾向になり、平成 22 年では過去最高の人口となっている。

・本区の人口増加率は、平成 7 年からは 5 年ごとに 3～4%の増加率で推移している。なお、全国の同期比の伸びは 1 %未満でほぼ横ばいとなっている。

本区の人口増加は、どのような要因によるものなのだろうか。以下のグラフから、その要因について社会増減（転入数－転出数）と自然増減（出生数－死亡数）から考え、さらに年齢別社会増減（横軸は年齢）についても明らかにする。

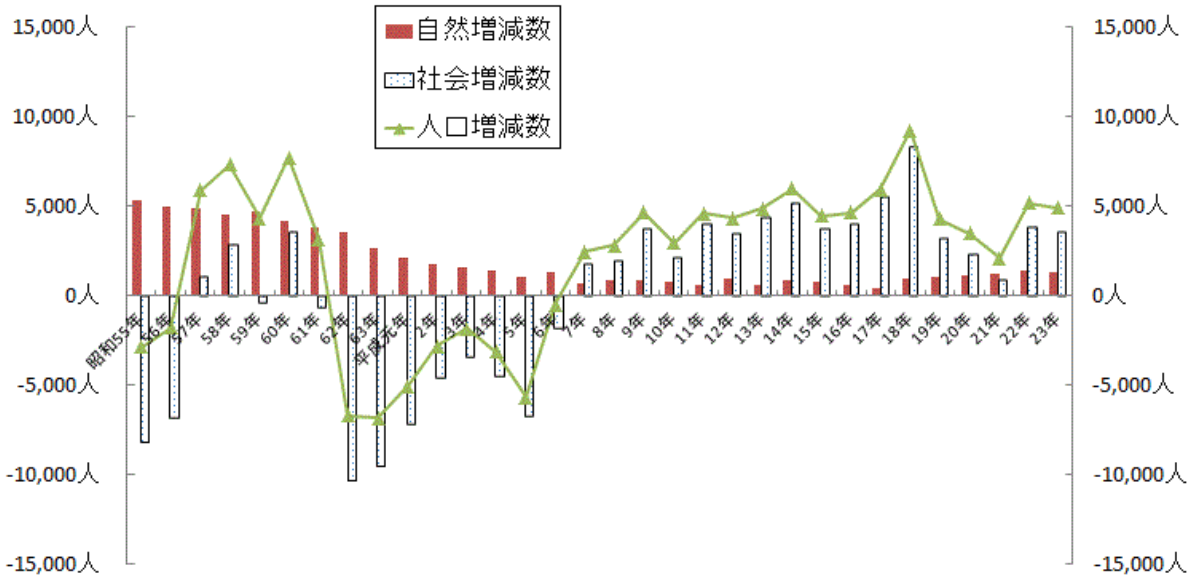


図 4：人口増減の推移（世田谷区）　出典：住民基本台帳

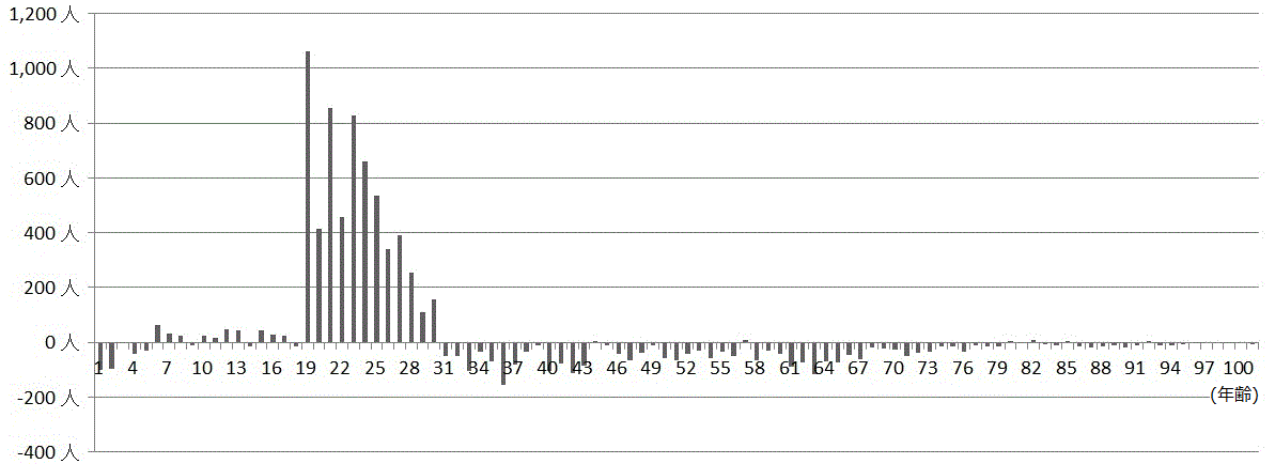


図 5：年齢別社会増減（世田谷区）　出典：住民基本台帳（平成 23 年度）

グラフから読み取れること

・平成 7 年以降の人口増加は、主に転入超過の社会増（転入数－転出数）によってもたらされている。

・社会増加の内訳を年齢別にみると、19 歳の増加が最も高く、転入超過は 20 代が大半を占め、その他の年代では概ね社会減となっている。

世田谷区の世帯数は、どのように推移しているのだろうか。一般世帯数[1]と 1 世帯当たり人員の推移とともにその推移を見ていこう[2]。

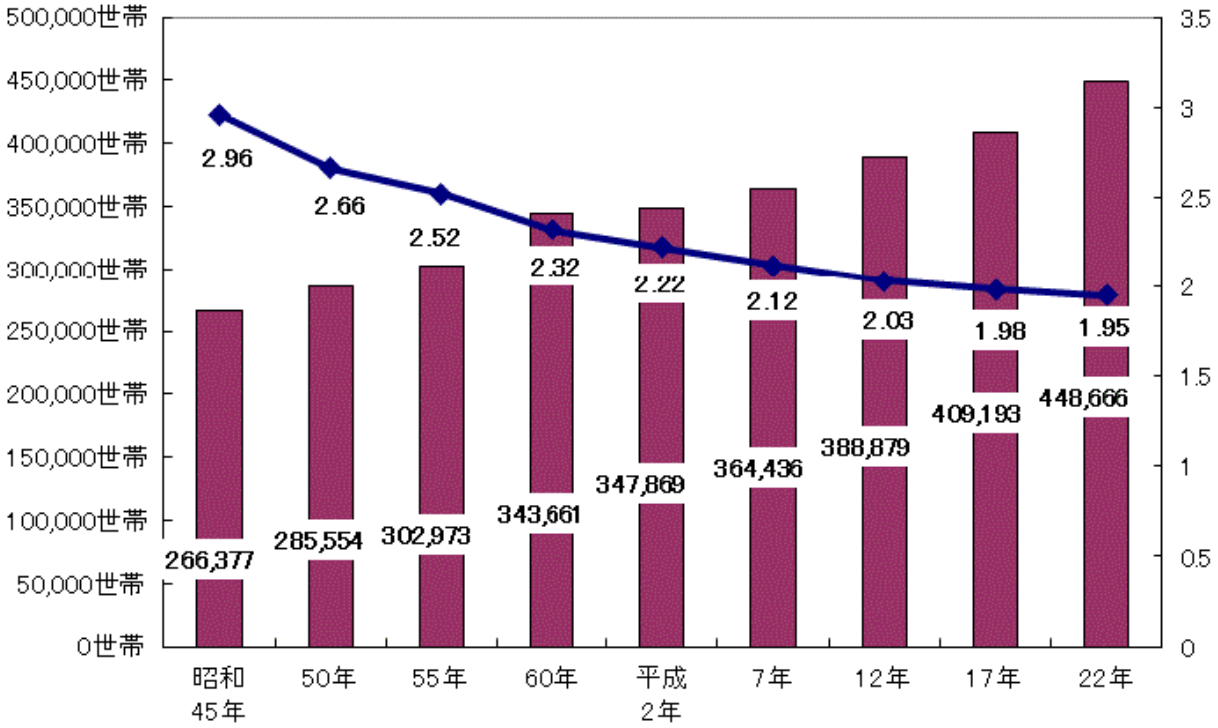


図 6：一般世帯数及び一般世帯の 1 世帯当たり人員の推移（世田谷区）

出典：国勢調査

グラフから読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の一般世帯数は過去最高の 448,666 世帯となった。

・1 世帯当たり人員 1.95 人と 2 人を下回っている。

1　「一般世帯数」とは、「住居と生計を共にしている人の集まり又は一戸を構えて住んでいる単身者ただし、これらの世帯と住居を共にする単身の住み込みの雇人については、人数に関係なく雇主の世帯に含め」る（総務省統計局）と定義されている。また、「一般世帯」は、次の３つの家族類型で構成されている。「A.親族世帯…二人以上の世帯員から成る世帯のうち、世帯主と親族関係にある世帯員のいる世帯、B.非親族世帯…二人以上の世帯員から成る世帯のうち、世帯主と親族関係にある世帯員のいる世帯、C.単独世帯…世帯人員が一人の世帯」（総務省統計局）。

2　『せたがや自治政策 Vol.4』(2012) の“家族形態の世帯別割合の現状と推移”(P.191-202) にて、本区の家族形態の長期的傾向について分析しているので、詳細はそちらを参照されたい。

次に世田谷区の人口構成について詳しくみていきたい。全国的に少子高齢化が進む中で、世田谷区の年少人口（15 歳未満人口）は、どのように推移しているのだろうか。

図 7：15 歳未満人口の推移（全国）　出典：国勢調査

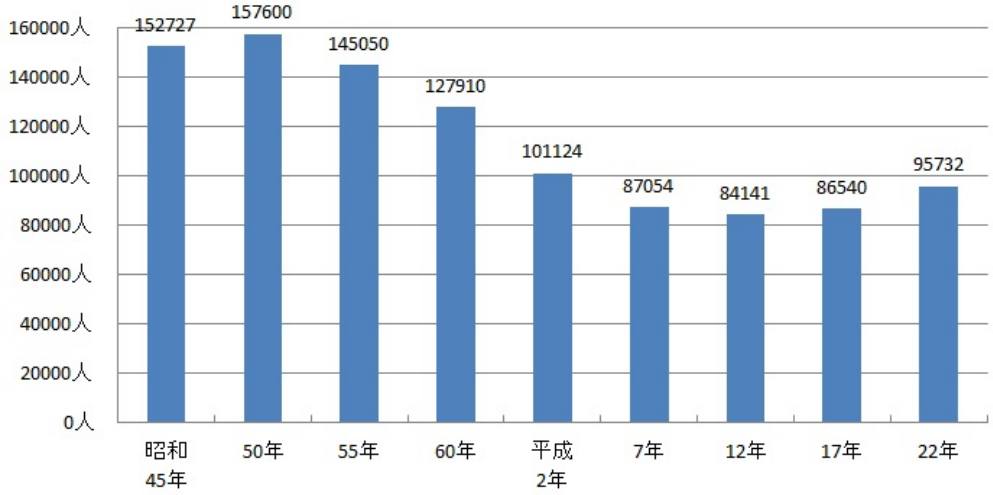


図 8：15 歳未満人口の推移（世田谷区）　出典：国勢調査

グラフから読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の 15 歳未満人口は 95,732 人となっている。

・全国では昭和 55 年頃から 15 歳未満人口が減り続ける一方、世田谷区では平成 12 年頃から増加に転じている。

次に、生産年齢人口（15 歳以上 65 歳未満人口）を見ていこう。わが国では少子高齢化により、すでにこの層は平成 7 年頃から減少に転じているが、本区の状況はどのように推移しているのだろうか。

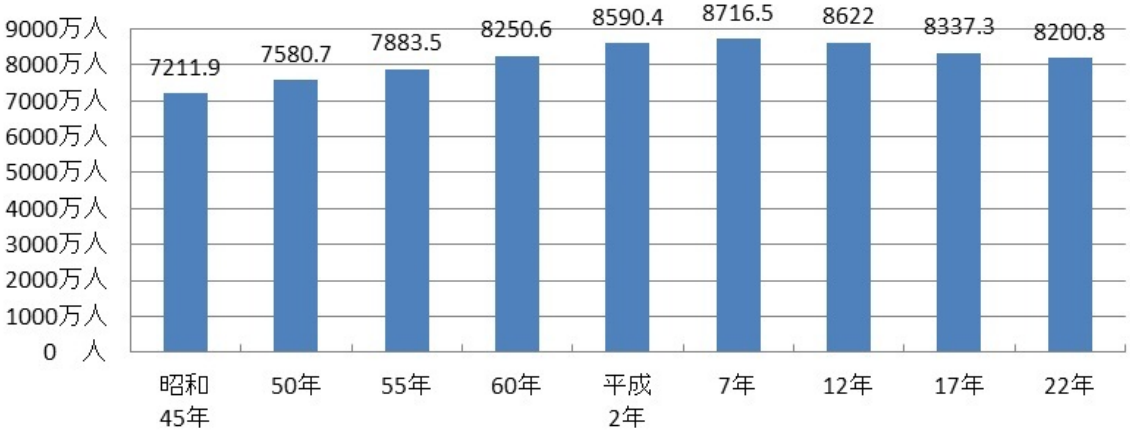


図 9：15 歳以上 65 歳未満人口の推移（全国）　出典：国勢調査

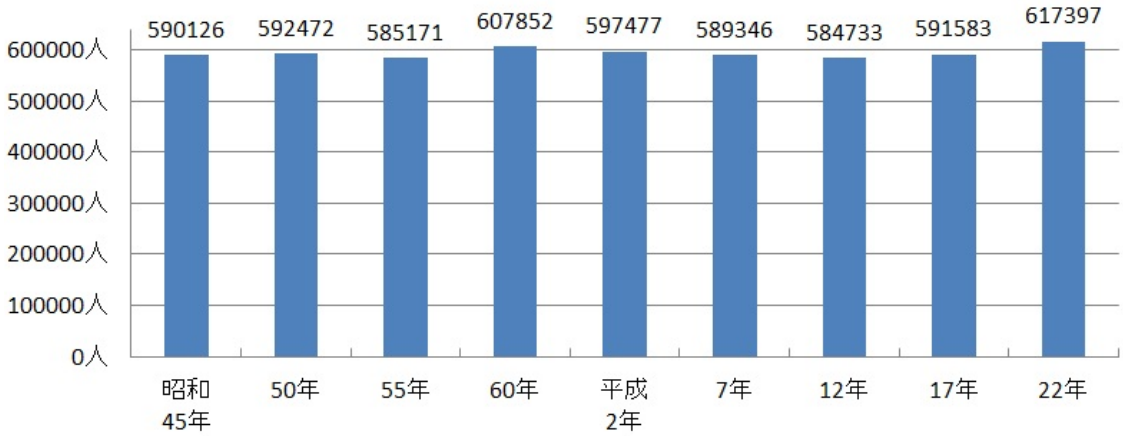


図 10：15 歳以上 65 歳未満人口の推移（世田谷区）　出典:国勢調査

グラフから読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の生産年齢人口は 617,397 人となっている。

・全国では生産年齢人口が平成 7 年頃から減り続ける一方、世田谷区では平成 12 年頃から増加に転じている。この傾向は、15 歳未満人口における全国との比較と同じといえる。

それでは、老年人口（65 歳以上人口）について見ていきたい。本区の高齢化は、全国と比較して、どのような推移をしているのだろうか。

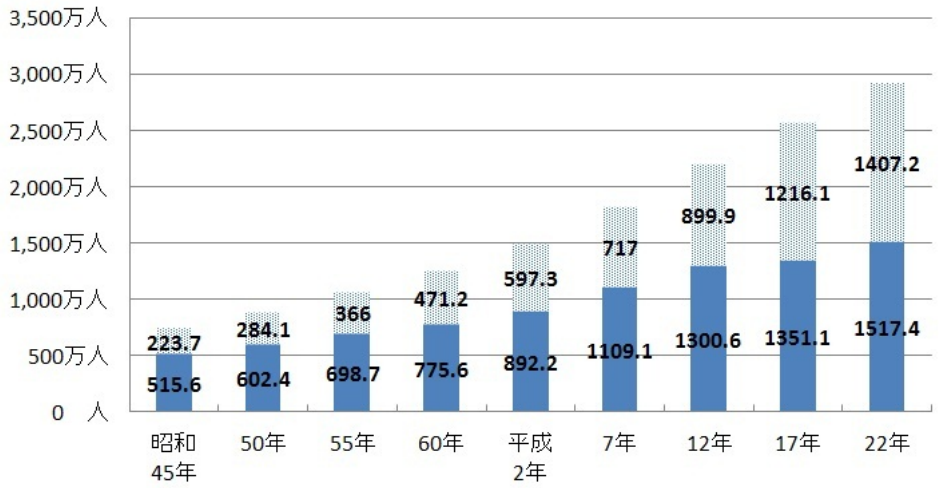


図 11：65 歳以上人口 75 歳未満人口《下段》および
75 歳以上人口《上段》の推移（全国）
出典：国勢調査

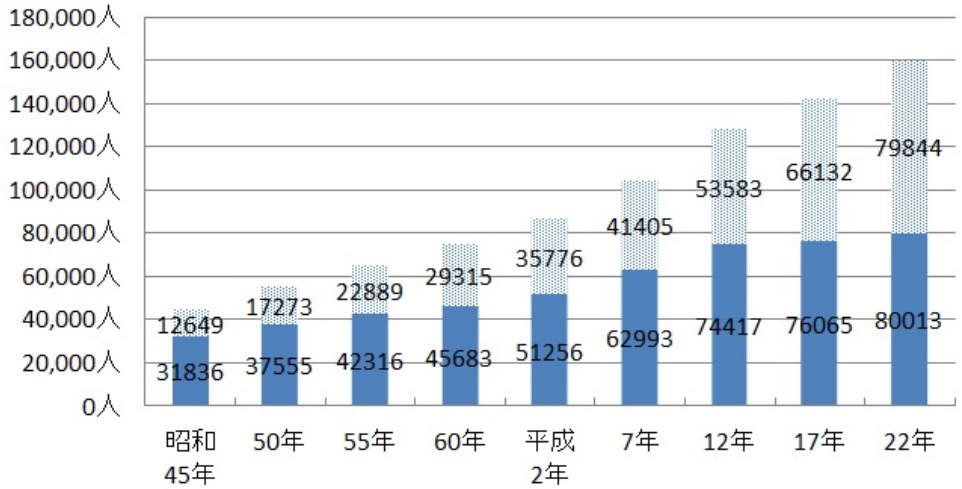


図 12：65 歳以上人口 75 歳未満人口《下段》および
75 歳以上人口《上段》の推移（世田谷区）
出典：国勢調査

グラフから読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の 65 歳以上人口は 159,857 人で、うち 75 歳以上人口は、79,844 人となっている。

・65 歳以上人口は、全国と世田谷区ともに概ね同じ速さで増加しており 40 年前と比べて約 4 倍になっている。

ここまで見てきた年齢 3 区分別人口推移（国勢調査）について、以下、左から年少人口（15 歳未満）、生産年齢人口（15 歳以上 65 歳未満）、老年人口（65 歳以上）の順で推移を見ていこう。

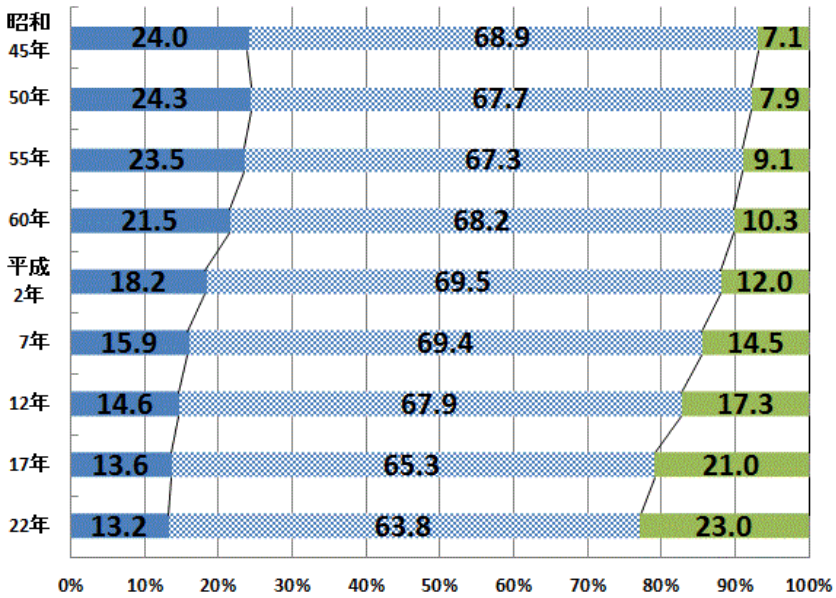


図 13：年齢 3 区分別人口の割合の推移（全国）

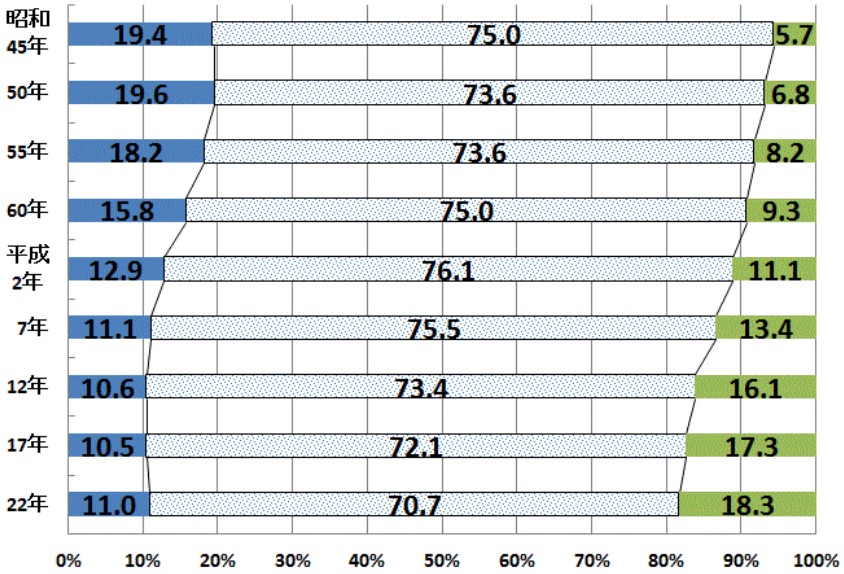


図 14：年齢 3 区分別人口の割合の推移（世田谷区）

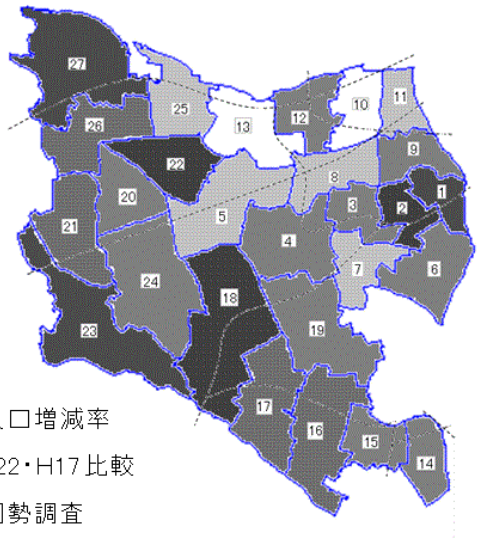
グラフから読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の年齢 3 区分別人口比率は 15 歳未満人口が 11%、15 歳以上 65 歳未満人口が 70.7%、65 歳以上人口は 18.3%となっている。

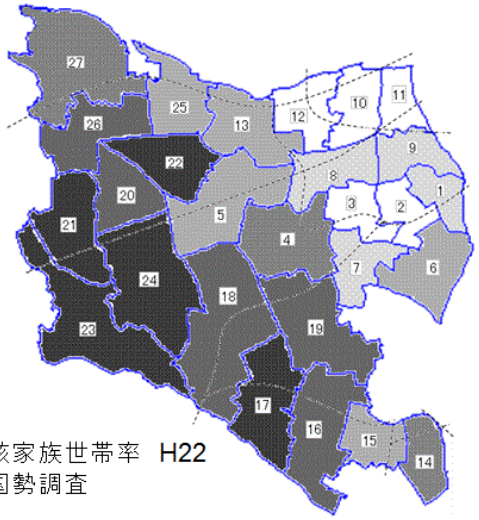
・全国では、少子高齢化が進む一方で、本区は高齢化が進むものの 15 歳未満人口比率が平成 7 年以降、10%～11%の横ばいで推移している。また、65 歳以上人口比率も全国に比べ 5%ほど低い。

2. 各地区の人口構成とその特徴

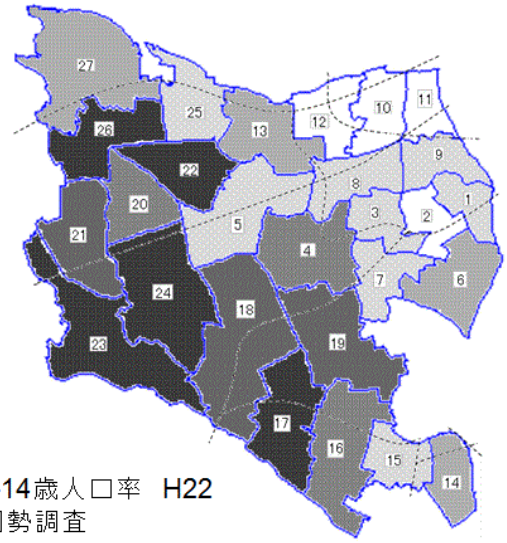
ここまで人口の推移を詳しくみてきたが、さらに本区の人口構成が各地区でどのように異なっているのか比較して、そこから読み取れる区内の地域特性を見ていきたい。



人口増減率
H22・H17比較
国勢調査



核家族世帯率　H22
国勢調査

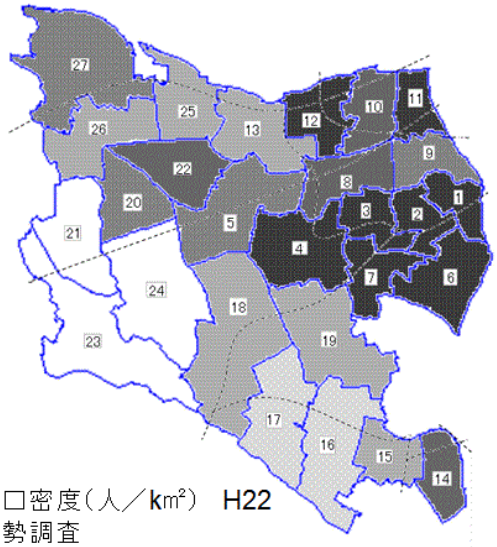


0-14歳人口率　H22
国勢調査

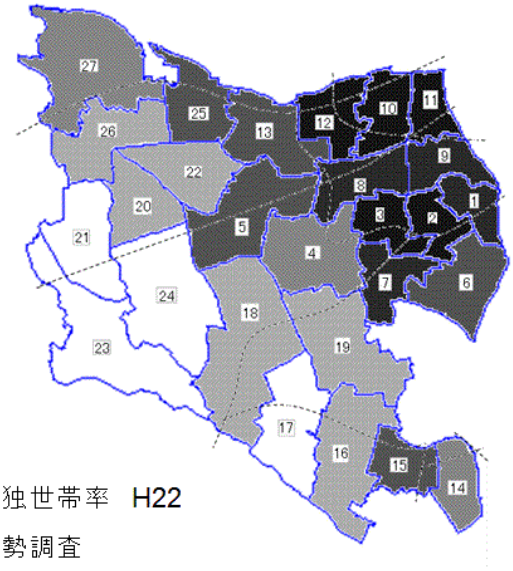
社会地図から読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）で人口増加率の高い地区は、核家族世帯率が多く、0～14歳人口率の高い地区と重なっている。

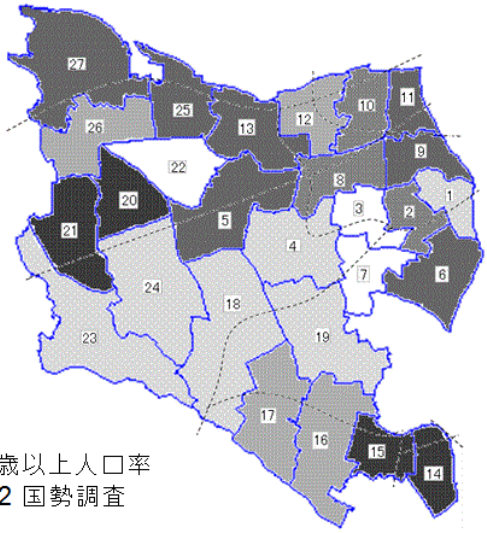
次に、地図の共通点だけでなくその違いを比較することで地域特性を明らかにする。



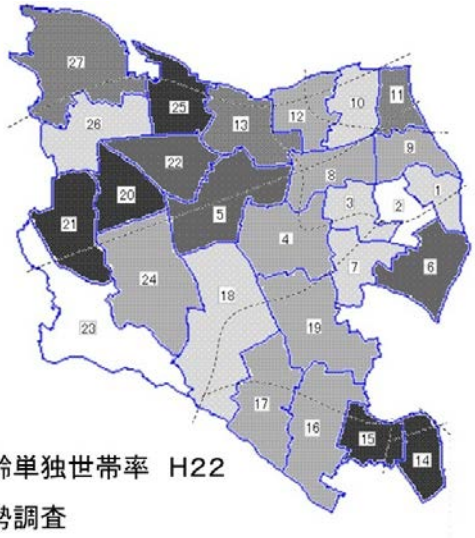
人口密度（人／km²）　H22
国勢調査



単独世帯率　H22
国勢調査



65歳以上人口率
H22 国勢調査



高齢単独世帯率　H22
国勢調査

社会地図から読み取れること

・世田谷区（平成 22 年　国勢調査）の人口密度が高い地区は、単独世帯率の高い地区と重なる。

・本区の 65 歳以上人口率の高い地区は、高齢単独世帯率の高い地区とほぼ重なる。

・高齢単独世帯率の高い地区は、他の年代を含む単独世帯率の高い地区とは異なる独自の分布をもつ。

3. 流入人口の動向

ここでは、本区に流入する人口について詳しく見ていこう。世田谷区では社会増減が人口の推移に大きな影響を与えていることはすでに確認した。さらに、社会増減に主な影響を与える年齢層を確認し、世帯形態や居住年数、地区についてどのような傾向が見られるのかについて具体的に考えていきたい。まずは、東京都と世田谷区の年齢別転入転出数（横軸は年齢）の分布を見ていこう。

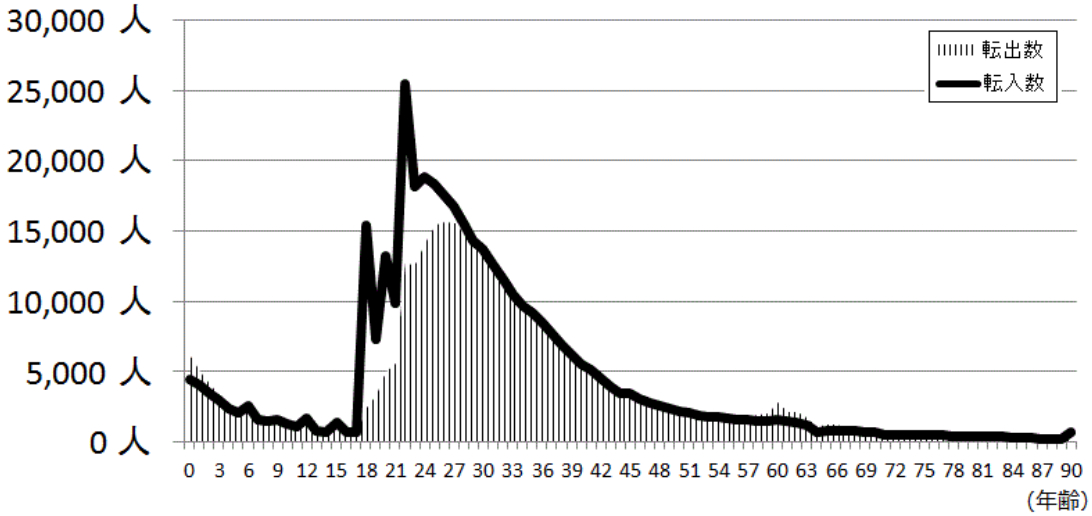


図 15：年齢別転入転出数（東京都）　出典：国勢調査（平成 22 年）

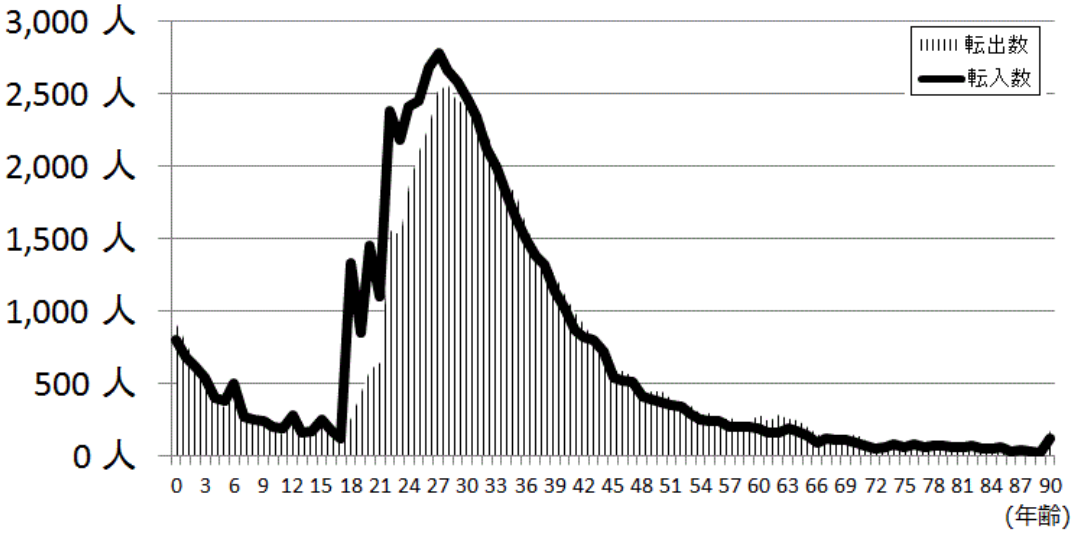


図 16：年齢別転入転出数（世田谷区）　出典：住民基本台帳（平成 23 年度）

グラフから世田谷区では転出、転入ともに 20～30 代の層が多くを占めていることが分かる。本区の 10 代後半から 30 代前半にみえる転入の山が転出を上回っている部分で人が流入している。東京都と世田谷区の同グラフを比較すると、本区は 30 代の人たちの流入、流出が高いという特徴がある。

グラフから分かることをまとめると、世田谷区の人口増減を考える上で、鍵となるのは社会増減であり、とりわけ、20～30 代の転入・転出に着目することが重要であるといえる。この流入する人たちは、どのような世帯で居住年数や居住する地区に傾向や特徴が見られるのだろうか。

そこで、毎年、転入してくる 20～30 代を流入人口とし、数年間住んだ後に転出していく同年代の人たちを流出人口として捉えて、その動向について見ていこう。分析にあたっては、以下の課題と仮説を置き論点を明確にしておきたい。

【課題】

世田谷区に流入する 20～30 代の人たちは、世帯形態によって居住年数や転入する地区に違いが見られるのだろうか。

前述の社会地図からは、人口増加エリアが南西部であること、また、そのエリアは核家族世帯率が高く、年少人口比率の高い地区でもある。このことから、仮説として次のことが考えられる。

【仮説】

本区に流入する 20～30 代のうち、核家族となる 2 人世帯は南西部に流入し、長く居住するのではないか。

【分析手法】

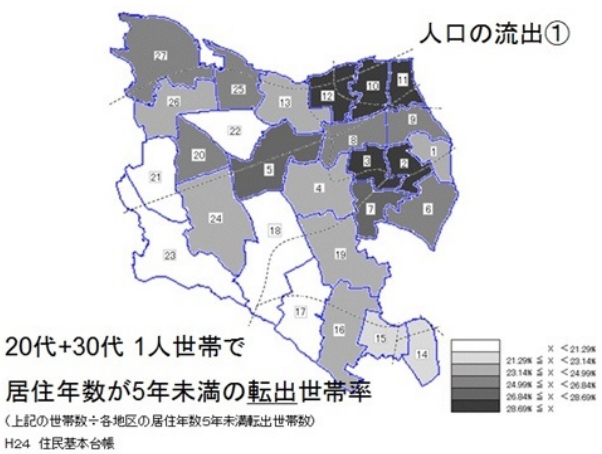
以上の仮説を確かめるため、次の 1 から 3 の手順で分析を試みる。なお、使用するデータは住民基本台帳データ（平成 24 年）である。

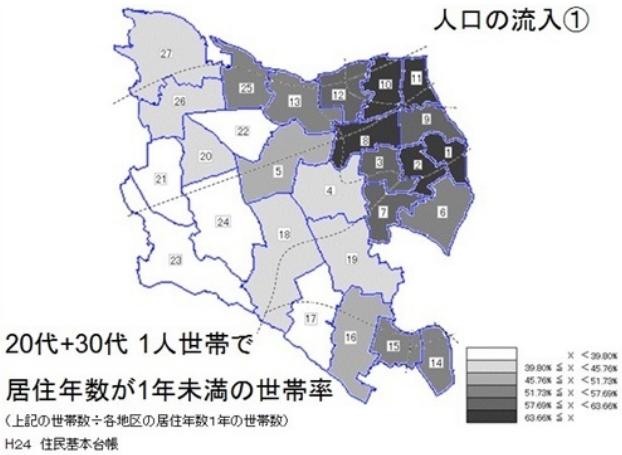
1. 20～30 代の流入人口（居住年数 1 年未満で転入してきた世帯）について 1 人世帯と 2 人世帯で分け、2 つの社会地図を比較して、地区の傾向をみる。
2. 20～30 代の流出人口（居住年数 5 年未満で転出する世帯）について同様に 1 人世帯と 2 人世帯で分け、2 つの社会地図を比較して、地区の傾向をみる。
3. 1 と 2 で作成した 4 枚の社会地図を見比べて仮説が妥当なものであるかを確かめる。
   仮に 20～30 代の流入人口と流出人口の傾向が 1 人世帯と 2 人世帯とも同じであれば、4 枚の社会地図は同じ分布を示し仮説は否定されることになる。

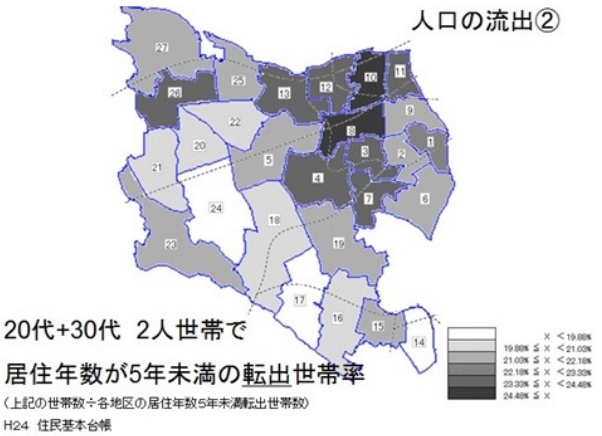
では、次頁でその分析結果を見ていきたい。

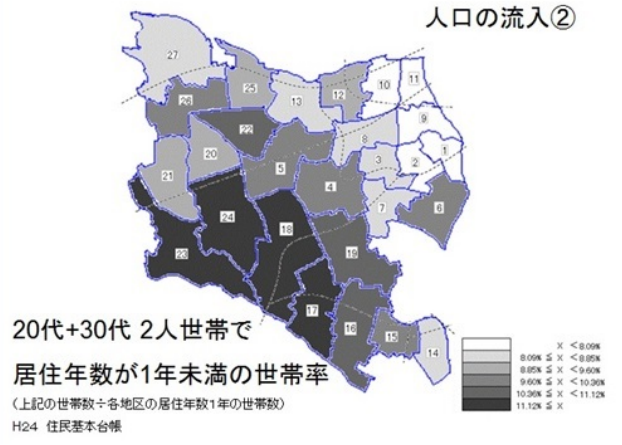
【分析結果】

結果は、次の４枚の地図となった。以下で詳しく考察していきたい。









まず、右側２枚の人口の流入（居住年数１年未満の転入世帯）に関する地図では、１人世帯と２人世帯では明らかな違いが読み取れる。２人世帯は南西部に流入している。この地区は、核家族世帯率の高い、年少人口の多い地区である。

次に左側２枚の人口の流出（居住年数が５年未満の転出世帯）に関する地図については、人口の流出に関して１人世帯と２人世帯に概ね差異は見られない。注目すべき点は、南西部の傾向である。流入する 20～30 代の２人世帯が多いにも関らず、他の地区に比べてその層の流出世帯が少なく、これは長期的に人口増加に寄与するといえる。

以上のことから、**仮説「本区に流入する 20～30 代のうち、核家族となる２人世帯は南西部に流入し、長く居住する」**は、データから概ね支持されるといえる。

まとめ

本稿では、『地域特性の析出』の継続研究として、世田谷区の現状について 3 つの視点から統計データの分析を試みた。その結果、次のことが明らかになった。

視点 1「人口の推移と現状」では、国勢調査と住民基本台帳のデータからこれまでの推移をグラフに整理し、世田谷区の人口を長期的な視点から概観した。

視点 2「各地区の人口構成とその特徴」では、平成 22 年度の国勢調査の結果を活用して、本区の社会地図を作成し、区内にある 27 地区の特徴を視覚的に捉えることができた。

視点 3「流入人口の動向」では、本区に転入・転出する人口について着目し、どのような人たちなのかについてデータに基づいて考察した。

これら 3 つ視点から、本区には国と異なる人口推移や地区ごとの人口構成の違い、さらに流入する人たちの中での傾向や違いを明らかにすることができた。

本研究では、このような人口動態の変化に関する考察が妥当であるか、より多くのデータから検証する必要があるが、それは今後の研究課題としたい。これらの世田谷の地域特性の析出に関する基礎的な研究の積み重ねが、本区の中長期的な視点に基づいた政策立案に寄与できれば幸いである。

参考文献

せたがや自治政策研究所, 2012, せたがや自治政策 Vol.4.

【参考資料：Newsletter Vol.10　①】

Newsletter vol.10　　2012. 10

せたがや自治政策研究所

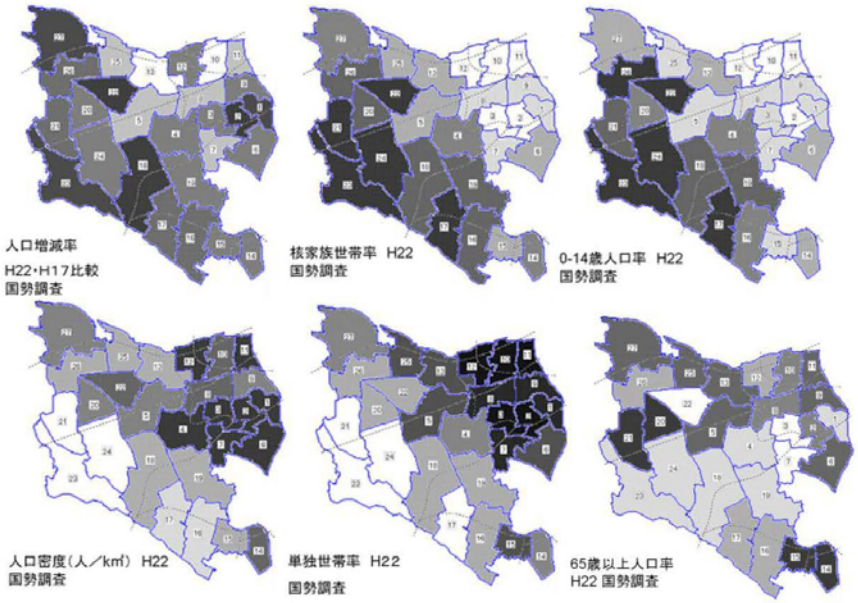
世田谷区の地域特性

社会地図から読み取れること　事例７

せたがや自治政策研究所では、国勢調査や住民基本台帳などから得られたデータから、世田谷区の地域特性について基礎的な情報について分析を進めています。ニュースレターでは、その分析結果を定期的に配信しています。紹介した図表は、イントラ[1]から見ることができます。

１．世田谷区の国勢調査（H22）の地図化する

平成２２年度に実施された国勢調査データを地図化し、本区の現状を視覚的に把握する。



グラフから読み取れる地域特性⑦

世田谷区では、南西側で人口が増えており、同エリアでは核家族で子どもが多い傾向がある。また、人口密度は都心に近い単身世帯の多い地区と重なっている。６５歳以上の高齢人口率は、本区では16%～21%の幅にあるが、祖師谷、奥沢、成城、九品仏地区は20%を超えている。

２．政策立案への応用

国勢調査の結果を地図し、区の現状について定量調査に基づいたきめの細かい共通認識を持つことができる。

[1] トップページ左下の“基本構想・政策研究担当課”→“研究所の活動”→“社会地図のデータベース”をご覧ください。

【参考資料：Newsletter Vol.10　②】

3．コラム　クロス表の作成について

アンケートは、対象者の本音を引き出すことで、事業の改善につながるきっかけになります。今回は、そのアンケート結果について表計算ソフトを使って職員が手早く分析する手法をご紹介します。分析にあたっては、エクセルを使用します。また、紹介した事例データはイントラに掲載してあります。ここでは分析にあたっての３つのポイントについて、次の参考図に沿ってご説明いたします。

＜1．アンケート結果を集計＞

No.	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7
1	1	1	2	32	3	3	1
2	1	3	1	20	5	4	1
3	1	2	2	25	6	5	2
17	2	3	2	42	1	3	4
18	1	2	1	35	1	5	4
19	2	1	2	20	2	5	1
20	2	3	1	18	3	4	2

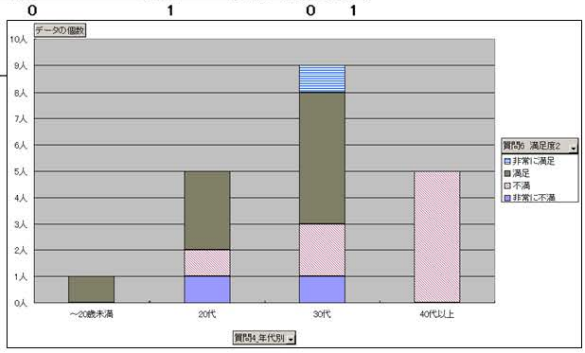
質問例

性別	質問1	1.男	2.女			
世帯構成	質問2	1.単身世帯	2.夫婦のみ世帯	3.夫婦と子世帯	4.一人親世帯	
所在	質問3	1.世田谷地域	2.北沢地域	3.砧地域	4.玉川地域	5.烏山地域
年齢	質問4	年齢				
きっかけ	質問5	1.区のお知らせ	2.ホームページ	3.チラシ・ポスター	4.知人の紹介	5.関係者　6.その他
満足度	質問6	1.非常に不満	2.不満	3.やや不満	4.やや満足	5.満足　6.非常に満足
利用目的	質問7	1.通院	2.出産	3.看護	4.リフレッシュ	5.その他

＜2．クロス表を作成＞

質問6［満足度］	非常に不満	不満	満足	非常に満足	総計
～20歳未満	0	0	1	0	1
20代	1				
30代	1				
40代以上	0				
総計	2				

＜3．グラフを使い視覚的に分析＞



1．まず、アンケートが回収されたら、集計にエクセルのシートを上表のとおり、回答内容を数値に置き換えて入力すると大量のデータを手早く入力することができます。
2．次に、クロス表を使って多面的に分析します。例えば「不満」と答えた人はどの年代の人なのかといったより深く理解することができます。この作業はエクセルにあるピボットテーブルが便利です。
3．さらにクロス表をグラフにして、複雑なデータを視覚化すると説明しやすくなります。

以上の３点です。イントラにある事例データをマニュアルにしたがって実際に操作すると、その手軽さが実感できます。職場で収集したアンケート結果を、分析される際にご活用していただければ幸いです。ご不明な点は当研究所までどうぞお問い合わせ下さい。

せたがや自治政策研究所ニュースレターは、政策研究に関する分析結果を伝えるため、職員向けに発行しています。
編集・発行：せたがや自治政策研究所　担当：青木　内線 2243

【参考資料：Newsletter Vol.11　①】

Newsletter vol.11　　2012. 12

せたがや自治政策研究所

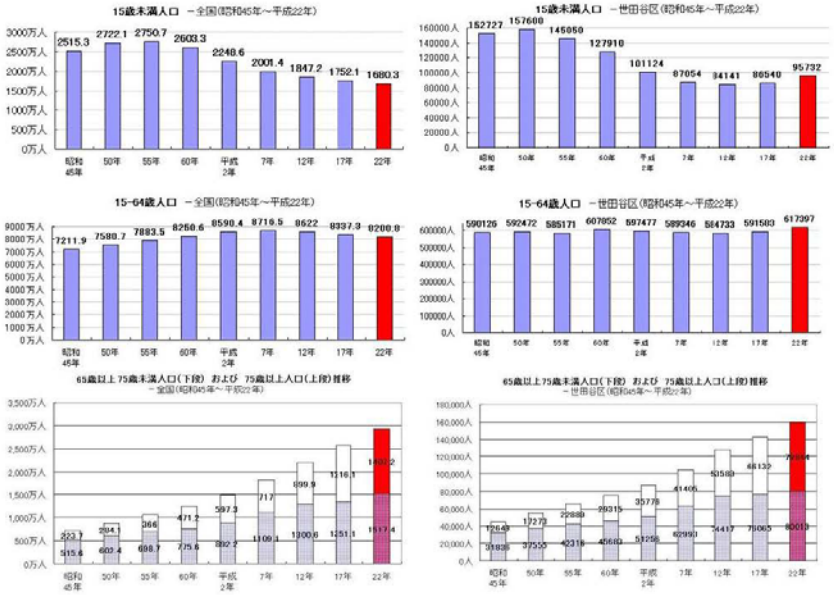
世田谷区の地域特性

社会地図から読み取れること　事例８

せたがや自治政策研究所では、国勢調査や住民基本台帳などから得られたデータから、世田谷区の地域特性について基礎的な情報について分析を進めています。ニュースレターでは、その分析結果を定期的に配信しています。紹介した図表は、イントラ[1]から見ることができます。

１．世田谷区の国勢調査（H22）をグラフ化して比較する

最新の国勢調査データと過去４０年間の推移を比較し人口構成の変化を把握する。



グラフから読み取れる地域特性⑧

少子高齢化の進展は、国と世田谷区で異なる。とりわけ、生産年齢人口である 15 歳～64 歳人口は、本区は約 58～61 万人で推移しているが、国は平成 7 年から減少している。また、15 歳未満の人口については、本区が平成 12 年より増加傾向にあるが、国は昭和 55 年以降、減少し続けている。

その一方、65 歳以上人口は、本区と国ともに 40 年前と比べると約 4 倍の伸びとなっている。

２．政策立案への応用

国勢調査の結果を国と世田谷区で比較することにより、全国的な人口構成の変化と本区の地域特性をふまえて、政策立案を考えるができる。

---

[1] トップページ左下の“基本構想・政策研究担当課”→“研究所の活動”→“社会地図のデータベース”をご覧ください。

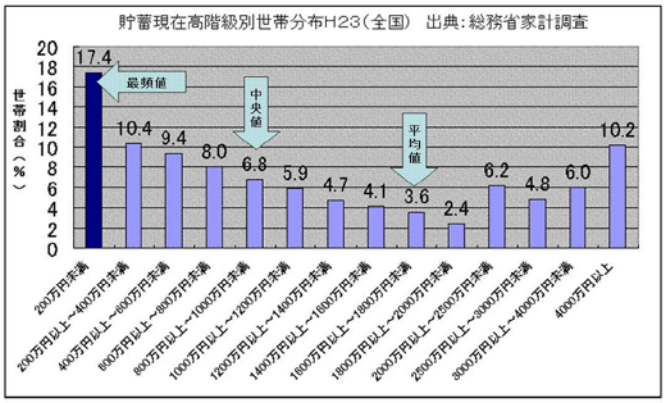
【参考資料：Newsletter Vol.11　②】

3．コラム　3つの代表値について[2]

データの特徴をつかむには、グラフを描いて視覚的に把握する方法のほかに、数値情報で把握する方法があります。代表的なのは、平均値、中央値、最頻値です。今回はこの代表値を使って、エクセルの機能を活用して分析する方法を紹介します。3つの代表値の説明は以下のとおりです。

・平均値・・・データを足し合わせてデータの個数で割ったもの。分布の重心を表す。
・中央値・・・測定値を小さい順（または大きい順）に並べたとき、ちょうど真ん中にくる値。
　　分布の両端に大きな値や小さな値があっても影響されにくいのが特徴。
・最頻値・・・データを区間で区切った中で一般的に用いる。区切られたデータ区間の中で、
　　出現頻度が最も高い区間、特にその区間の真ん中である階級値を最頻値と言う。

それでは、この3つの代表値を使って、以下のデータをみていきましょう。



２人以上の世帯の１世帯当たり貯蓄現在高の平均は**1664万円（平均値）**ですが、世帯を金額の低い世帯から高い世帯へと順に並べたときに、ちょうど中央に当たる世帯の貯蓄現在高は**991万円（中央値）**と平均を下回っています。これは、貯蓄の多い世帯が、平均値を押し上げているためです。約３分の２の世帯は平均値を下回っています。また、もっとも多いグループは、**200万円未満（最頻値）**であることが分かりました。

平均値は、グラフが富士山のように裾が左右同じ分布をしているときはデータ全体を代表する値として実感に合いますが、上図のように分布が左右に歪んでいるときは、中央値の方が実感により合った値を示してくれます。このように、データを見る際はいくつかの代表値を活用して、その全体像を把握することが大切です。

以上の３つの代表値は、エクセルの関数を使うと簡単に求められます。ご参考までに当イントラでサンプルを掲載しています。職場で収集したアンケート結果を、分析される時などにご活用していただければ幸いです。ご不明な点は当研究所までどうぞお問い合わせ下さい。

せたがや自治政策研究所ニュースレターは、政策研究に関する分析結果を伝えるため、職員向けに発行しています。
編集・発行：せたがや自治政策研究所　担当：青木　内線2243

[2] 引用・出典　総務省統計研修所『１．貯蓄の世帯分布』, Excel ビジネス統計分析(2011) 翔泳社

【参考資料：Newsletter Vol.12　①】

Newsletter vol.12　　2013. 3

せたがや自治政策研究所

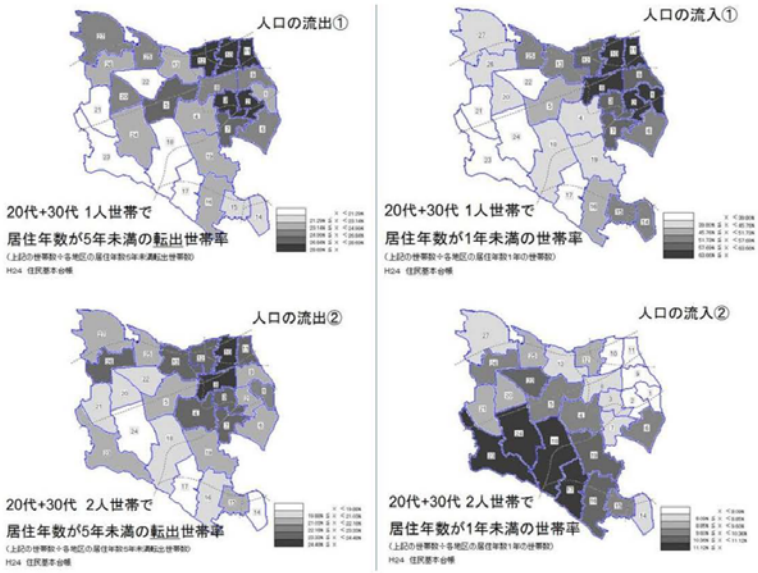
世田谷区の地域特性

社会地図から読み取れること　事例９

せたがや自治政策研究所では、国勢調査や住民基本台帳などから得られたデータから、世田谷区の地域特性について基礎的な情報について分析を進めています。ニュースレターでは、その分析結果を定期的に配信しています。紹介した図表は、イントラ[1]から見ることができます。

１．世田谷区の住民基本台帳データ（H24.８時点）から人の流れを地図化して比較する

最新の住民基本台帳データを活用して、住民の流出入について把握する。



グラフから読み取れる地域特性⑨

世田谷区の人口流出入を見ると、２０代～３０代で１人世帯の多く流入する地区は北沢・世田谷地域の都心に近いエリアで、２０代～３０代の２人世帯の多く流入する地区は砧・玉川地域となっているが、人口の流出は世帯人数にかかわらず流入の多い北東の地区と重なっている。

このことから、２０代～３０代の２人世帯で流入する人たちは砧・玉川地域で定着していることが考えられる。

２．政策立案への応用

世田谷区の人口流れとその定着傾向を把握することで、地区の特性にあった政策立案を考えることができる。

---

[1] トップページ左下の“基本構想・政策研究担当課”→“研究所の活動”→“社会地図のデータベース”をご覧ください。

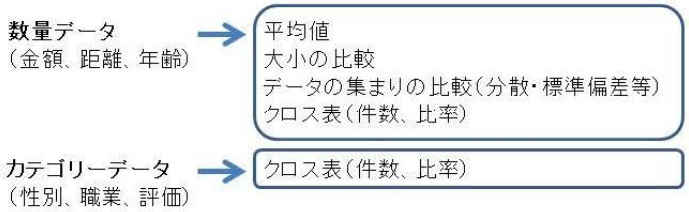
【参考資料：Newsletter Vol.12　②】

3．コラム　アンケート調査の前に知っておきたいデータの特性[2]

アンケート調査を行う前に、集めるデータの種類の違いについて知っておくことは、調査結果の分析を行う事前の準備につながります。今回は、そのデータの特性についてご紹介します。

まず、データは大きく２つに分けられます。それは、数えられるデータの「数量データ」と、数えられないデータの「カテゴリーデータ」です。

「数量データ」（金額、距離、年齢等）は、単位を持つため、データ間の大小関係を比べることができます。一方、「カテゴリーデータ」（性別、職業、良い悪いといった評価等）は、文字データをそのままエクセルで分析することができませんので、例えば「男」は１、「女」は２などとして数値化して分析します。しかし、数値化しても男女の平均が 1.5 だからといって意味はなく、大小関係は比較できません。



※数量データとカテゴリーデータの比較は、数量データをカテゴリーデータにして比較することができる。
　例）　数量データの年齢を20代、30代に分類し、性別とのクロス表を見る。

また、「カテゴリーデータ」の「評価」については、便宜的に「とても良い」、「良い」、「どちらでもない」、「悪い」、「とても悪い」を、それぞれ得点化して平均を出すことはできます。例えば、「とても良い」を３点、「良い」を２点…として、平均を計算します。しかし、「評価」について、「とても良い」と「良い」、それに「どちらでもない」の差が、同じ１点差とは限らないのではないか？というような解釈をめぐる議論が常につきまといます。

結論としては、できるだけ「数量データ」を集めることが得策といえます。「数量データ」であれば、平均を見たりデータの大小を比較したり、データの集まりを比較することで多くの情報を引き出すことができるからです。しかし、「カテゴリーデータ」でなければ分からない重要な情報もあります。「数量データ」と「カテゴリーデータ」を組み合わせて分析する場合もあります。したがって、このような２種類のデータの特性があることを踏まえ、調査項目を考えていくことが大切となります。今後の調査項目の作成にあたって参考にしていただければ幸いです。

ニュースレターに関するご不明な点は、せたがや自治政策研究所までどうぞお問い合わせ下さい。
※お知らせ：せたがや自治政策研究所にある本の蔵書目録をイントラから見ることができます。本は、研究所（第一庁舎３階）にて職員へ貸出しておりますのでお気軽にお声がけください。

せたがや自治政策研究所ニュースレターは、政策研究に関する分析結果を伝えるため、職員向けに発行しています。
編集・発行：せたがや自治政策研究所　担当：青木　内線 2243

[2] 引用・出典　Excel ビジネス統計分析(2011) 翔泳社